

# C. アレギザンダー理解のために

## 「パタン・ランゲージ」の思想的背景

伊藤雅春

### 1. テキストとしてのアレギザンダー

C.アレギザンダーが1960年代の初めに日本において知られ始めてから、すでに20年あまりが経つが、最近まで彼の思想あるいは作品の全容を知るのは、容易な状態ではなかった。一般には、1968年に『SD』誌が「システムの思想」という彼の特集を組んだのが、最も早い紹介の一つだろう。その後、1970年の『美術手帖』において、磯崎新が「建築の解体・5」としてアレギザンダーを取り上げている。最近になって、1981年に柄谷行人が『群像』誌上に「隠喩としての建築」という構造主義批判の文章を載せ、その中でC.アレギザンダーの『都市はツリーではない』(1965)を取り上げ、セミラティス構造について新しい視点から論じたことは記憶に新しい。

アレギザンダーは、ある程度の規模をもって実現したプロジェクトが少なかったこともあって、日本のジャーナリズムの体質には馴染まず、これまで作品があまり知られているとは言えない。それゆえ、作品から彼の全容を知るとはとてもできない状態であった。論文としては『形の合成に関するノート』(1964)と、『オレゴン大学の実験』(1975)が翻訳出版されているが、その間の10年間を埋めるものがなく、そのうえ内容的に、この二つの論文だけから両者のつながりを理解することは困難であり、日本におけるアレギザンダー受容は、読み手の興味によってバラバラな状態であった。昨年『パタン・ランゲージ』(1977)の翻訳が出されたことによって、アレギザンダー思想についての議論をより深める条件が次第に整ってきていると言える。しかし、まだ『The Timeless Way of Building』(1979)を全体を通して日本語で読むことはできず、最も新しいセンタリング・プロセスの全容を知ることは困難な状態である。「システムの思想」で浅田孝は、アレギザンダーを新しいファンクショナルリズムと位置づけ、創造の理論化、科学化という点から興味を示していた。磯崎は『都市はツリーではない』でアレギザンダーの示したセミラティス構造による近代都市計画批判を評価して、浅田と共にデザイン行為の構造の解明と、そのコンピューター指向の方法論という点に注目した。

アレギザンダーの方法は、一般に多様で人間臭い自然な環境を、論理的かつテクノロジー的に再構成するシステム論的方法として位置づけられ評価されていた。柄谷は、自然都市という多様体の数学的構造(セミラティス)秩序への還元というまさに前述の

点を、構造主義の論理構造と同質のものとして位置づけ、アレギザンダーの中に構造主義が本来的にもつ自然の経験的な多様性に対する“嫌悪”の最も徹底した現われを見出し、セミラティスにおいてすら単純化は免れないという。合理的、客観的な手続きを選択するところにこそ「信仰」の問題がある、と指摘している。

一方で、『オレゴン大学の実験』に代表されるユーザー参加の思想に対する賛同者は多い。確かにこの本によって彼は、現在の「盈進プロジェクト」を手中にしたことも事実である。

しかし、これらのテキストとしてのみ紹介されたアレギザンダーは、日本の建築界の中で、実にさまざまな理解のされ方をするという結果になった。テキストは読み取りによってその像を結ぶため、読み手自身の思考の枠組みがそこに投影される。テキストの読まれる時代によって、また読み手の資質に応じて、さまざまなアレギザンダー像が並立しているというのが現実であろう。その意味で、日本においてはC.アレギザンダーの存在自体が、錯綜した〈テキスト〉なのである。

### 2. C.アレギザンダー理解の困難性

ところで、アレギザンダー理解の混乱は、60年代の『ノート』(『形の合成に関するノート』)から70年代の『パタン・ランゲージ』に至る時点でなされた価値観の導入という点にある\*1。60年代にアレギザンダーを評価した人びとは、いわゆる彼のシステムティックな設計方法論に賛同を示した方法論者であった。彼らには、「パタン・ランゲージ」という人間の直感に頼るような方法は、明らかに後退として映ったにちがいない。そのうえ、この方法は、誰でもが使えると言いながら明確な価値が反映されており、ツールとしての共通言語として設計組織が自在に使用できるようなものとは程遠いものになってしまったからである。

次に彼を支持したのは、70年代の住民参加、ユーザー参加の支持者たちである。ところがここで奇妙なことに、作品主義の近代的な建築家たちからのアレギザンダーに対する反論とユーザー参加の支持者の賛同は、『パタン・ランゲージ』においてクロスしてしまうのである。つまりアレギザンダーが、あくまでも「あなたはあなた、僕は僕」という多価値論の世界を排し、より良い質のためには唯一の価値観に立脚する立場を選択しているため、「パタン・ランゲージ」の方法では、ユーザーの言いなりに物

をつくっていくことになってしまうとする批判よりも、むしろユーザーの多様な価値観に対応できる方法という幻想のほうが怪しくなってしまうわけだ。

これは、彼が厳しく実践と理論の乖離を排し、つくり出される質が「感情」に立脚し、「事実」と「価値」とが単一不可分なものとなるような世界観を信じているためであるが、このことによって彼は、相対主義的、不可知論的世界観に陥ることを免れているのである。この単一価値観の立場は、民主的な方法という点で、「パタン・ランゲージ」を支持していた人びとを戸惑わせることになった。価値のおしつけ、帝国主義、ファシズム的思考という反感であるが、これに対しアレギザンダーは、彼の表明している価値は、個人がより自己に誠実となり自分自身らしくなる世界を指向するものであり、その結果、人びとの望みは自然と歩み寄り一つのものになると主張する。これは後述するニューサイエンスや、その他の現代思想の明らかにしつつある世界観と同調したものであり、きわめて広範囲な分野の思想を背景にしているのである。

### 3. 「パタン・ランゲージ」に対する違和感

「パタン・ランゲージ」における一番の問題点は、やはり前述の彼が前提としている価値観にある。彼の世界観があまりに予定調和的であり、現代の都市生活の様式と相容れないという点で、個々のパタンの具体的な内容については当たり前と思えることが多く、異論の余地のないもののだとしても、それぞれのパタンが集まった総体が指し示す環境には、抵抗感があるといった点である\*2。この辺りの問題については、前述した柄谷の「隠喩としての建築」においても触れられているが、最近の問題意識で言えば、アレギザンダーの世界観は、何か過剰なものを排除することで成立する世界であり、多様なものに対する敵意を感じるということなのだろう。同様の議論は、アイゼンマンとアレギザンダーの立場の違いに関する難波和彦の指摘に明快に表現されている。すなわち、〈現実の不調和の存在を認め、それを本質的なものとする〉という「事実」から出発するアイゼンマンと、〈その不調和をただし、調和をもたらすことを建築家は委託されている〉という「価値」から出発するアレギザンダーの違いである\*3。現実の世界を前にして、「パタン・ランゲージ」の世界観を「信じる」ことができるかという問題になるのである。ここにまた、「パタン・ランゲージ」をめぐる複雑さがある。さらにこれは、「パタン・ランゲ

ージ」の世界が中世回帰のように感じられ、過剰、多様性、テクノロジーといった問題が取り込まれていないという批判となって現われる。

第2に、施工のパタンは、現実に設計にたずさわる者には抵抗の大きな部分であったようだ。これは「パタン・ランゲージ」とセットになった直営方式の提案まで含めて、現実的ではないと感じる人が多い。ものづくり方にまで言及しないと、すべてが商品化された世界の中から生き生きとした建設プロセスを通して生き生きとした環境を実現することはできず、もの本来の使用価値の復権は不可能だとするものである。今、使用価値の存在を認めることができるかどうかにかかっている。

#### 4. 「パタン・ランゲージ」の世界観

「パタン・ランゲージ」の背景にある彼の世界観は、建築の枠組みをはるかに越えた近代批判によって支えられている。アレギザンダーはカリフォルニア大学バークレー校で1963年以来教鞭を取っているが、1960年代の学生運動の拠点であったバークレーという環境が、彼に与えた思想的影響は少なからずあるものと推測される。さらにカリフォルニアという場所は、今に至るまで極めて特異な思想的位置を占めている。ニューエイジ運動と呼ばれる世界観の変革運動（機械論的、父系的世界観から環境主義的、母系的世界観への転換を目差す運動）の拠点であり、ニューサイエンス、フェミニズム運動、エコロジー運動、ホリスティックヘルス運動、ヒューマンポテンシャル運動、A. T (オルタナティブ・テクノロジー) 運動などが渦巻く中に「パタン・ランゲージ」の全体論的な世界観があると見るべきであろう。N. チョムスキーの深層構造を前提とする「変形生成文法」やT. クーンの「パラダイム論」との関連は明白であるが、特に、ニューサイエンスと呼ばれる一連の自然科学の流れとの関連に注目したい。現在のさまざまな危機（不調和）に対して、全体論的な見方、関係性の重視は、むしろ自然科学の分野から問題にされており<sup>4</sup>、「パタン・ランゲージ」の価値観は、そうした全体性をもった構造を前提につくり上げられている。具体的には、アーサー・ケストラーのホロンや、デヴィット・ボーム、カール・プリブラム

のホロムーヴメントとの係わりが推測される場所である。

ボームが、「すべての人間は善を欲している。実際、人は自分が重要だと思う場面において、うまく適合しないように見えるものを望むことはない。諸悪の根源は、各人が善についての断片的な考え方を追求しているという事実の渦中にこそ巣喰っている。」<sup>5</sup>という時、アレギザンダーの世界観との同一性を強く感じることができる。

エコロジーやA. T運動の影響も「パタン・ランゲージ」からは読みとることができる。A. T運動の具体的な事例の中には、施工のパタンと非常に似かよった発想のものを見ることができる<sup>6</sup>。A. T運動の思想的源流の系譜は、「スモール・イズ・ビューティフル」で有名な、E. F. シュマッハーに始まり、最近ではより幅広い活動を展開しているイヴァン・イリイチに引き継がれていくが、イリイチとアレギザンダーの世界観の類似性は興味深い問題である。イリイチに見られる近代批判は、「パタン・ランゲージ」における価値観と通底しており、例えば一学習のネットワーク(18 NETWORK OF LEARNING)には、イリイチの「脱学校化社会」が引用されていることから判るが、全体として、「自律的な生活」のイメージをその価値の中心に置いており、適度な量を超える過剰性は否定するという点は共通している。専門家が、人間の自らつくり出す自律的な活動を麻痺させるという、イリイチの専門家権力論が、アレギザンダーの目差す建築家の解体の方向と最終的に一致するものかどうかは、多少疑問が残るところであるが、主体性論の問題として重要な点である。

フェミニズムとエコロジーに関係する問題は、さらに微妙な問題であると言える。「パタン・ランゲージ」における一男と女(27 MEN AND WOMEN)には、イリイチのジェンダーの思想に近いものを感じるが、フェミニズムの陣営からは、ジェンダーに対し激しい批判が投げられている<sup>7</sup>。この点は、カプラとイリイチの異なる点でもある。このほかにも、ベイトソン、プリコジンなどのシステム哲学との関連や、ユングなどの心理学やサイコセラピーとの関係も推測されるのである。

これらの広範な思想を背景として「パタン・ランゲージ」の価値観が呈示していることを理解しないと、現代生活に毒されているわれわれには、彼の思想は、あるいはナンセンスなものに見えてしまうかもしれない。

#### 5. 盈進プロジェクト

こうして見ると、C. アレギザンダーの実作品を初めて目の当たりに見ることができるわれわれは、そこに何を発見するのか、われわれ自身が問われているということに気づく。

従来の建築家と作品の関係をアレギザンダーが否定する以上、その枠組みで彼を評価することはナンセンスであろう。消費社会における商品を逃れて、彼の言う「名づけえぬ質」がそこに実現されているかどうかを、心静かにして虚心に感じるのが先決である。小野二郎やイリイチの言うような使用価値の復権が実現されえたか<sup>8</sup>、それともボードリヤールの言うように使用価値は回顧的な幻影に過ぎないのか、時間をかけて検証することが必要であろう。

しかし1970年の大阪万博においては、C. アレギザンダーも「人間都市」という展示で参加していたのである。つくば万博と盈進プロジェクトの距離はこの15年間にどれほどの隔たりを見せているのか、よく見ておく必要がある。そのうえで、盈進プロジェクトを否定するか肯定するかは、われわれ自身の建築を、どちらの方向に向けて突き動かしていくのかを表明することにほかならない。それほどまでに、エポックメイキングな出来事の一つであることは確かである。

(いとう まさはる 建築家)

\*1 『群居-5』、「CM方式とゼネコン方式」

\*2 『PLism-No.1』、パタン・ランゲージ研究会発行

\*3 『都市住宅』85年5月号、「仕掛け考」3

\*4 『A+U』84年9月号、論争ピーター・アイゼンマン vs クリストファー・アレギザンダー「建築の協和音と不協和音」

\*5 『断片と部分』デヴィッド・ボーム著、佐野正博訳、工作舎、1985

\*6 『全生命のためのテクノロジー』ズワミ・プレム・ブラブツク監修、メルクマール社、1983

\*7 『ジェンダー』イヴァン・イリイチ著、玉野井芳郎訳、岩波書店、1984

\*8 『ウィリアム・モリス』小野二郎著、中公新書、1973/『エネルギーと公正』イヴァン・イリイチ著、大久保直幹訳、晶文社、1979

## C. アレギザンダー 25年間の歩み

長塚正美

アレギザンダーの25年間にわたる活動を、彼の思想を支える幾つかのキーワード「有機的秩序」「パタン」「価値」「生成力」「プロセス」を中心に概観してみよう。

#### 有機的秩序

『オレゴン大学の実験』における「有機的秩序」あるいは「全体」wholeで、彼が言わんとしたこと

とは、何だったのか。ここで用いられている「全体」とは、アーサー・ケストラーが提唱する「ホロン」<sup>1</sup>Holon という概念に近い。「ホロン」は、システムを構成するサブシステムが連続的なレベルをもつ複合体の1要素であり、上位のレベルについては要素的に、下位のレベルには一つの全体としてふるまい、同一のレベルでは協調し合って、システムの変動を最小に抑える働きをしている。ちょうど、

人体の中の器官や何々系といったものを当てはめて考えると理解できる。

このようなシステムの1要素を、完全に要素とも全体とも定義することが適当でないことから「ホロン」と名づけている。また「ホロン」によって構成されるシステムは、サブシステム同士の境界が曖昧であるという特徴をもっている。このようなシステムとサブシステムが演じるある協調関係を、「有機

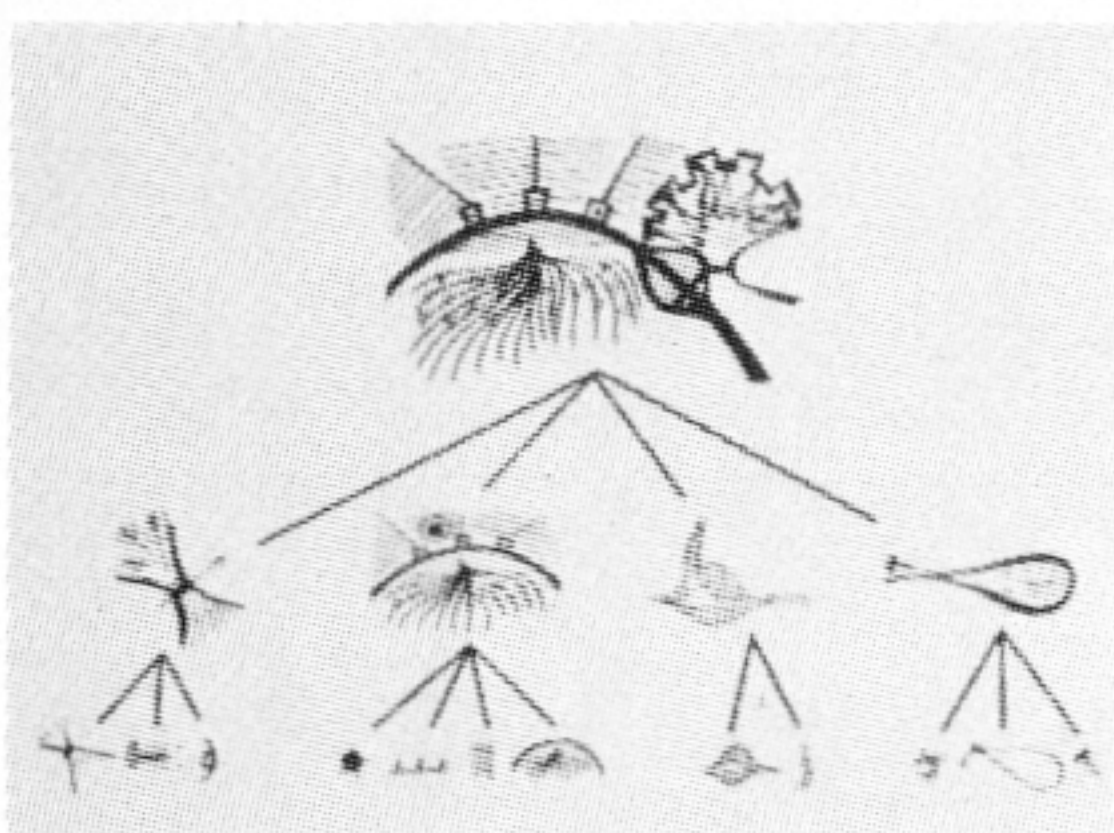


図1

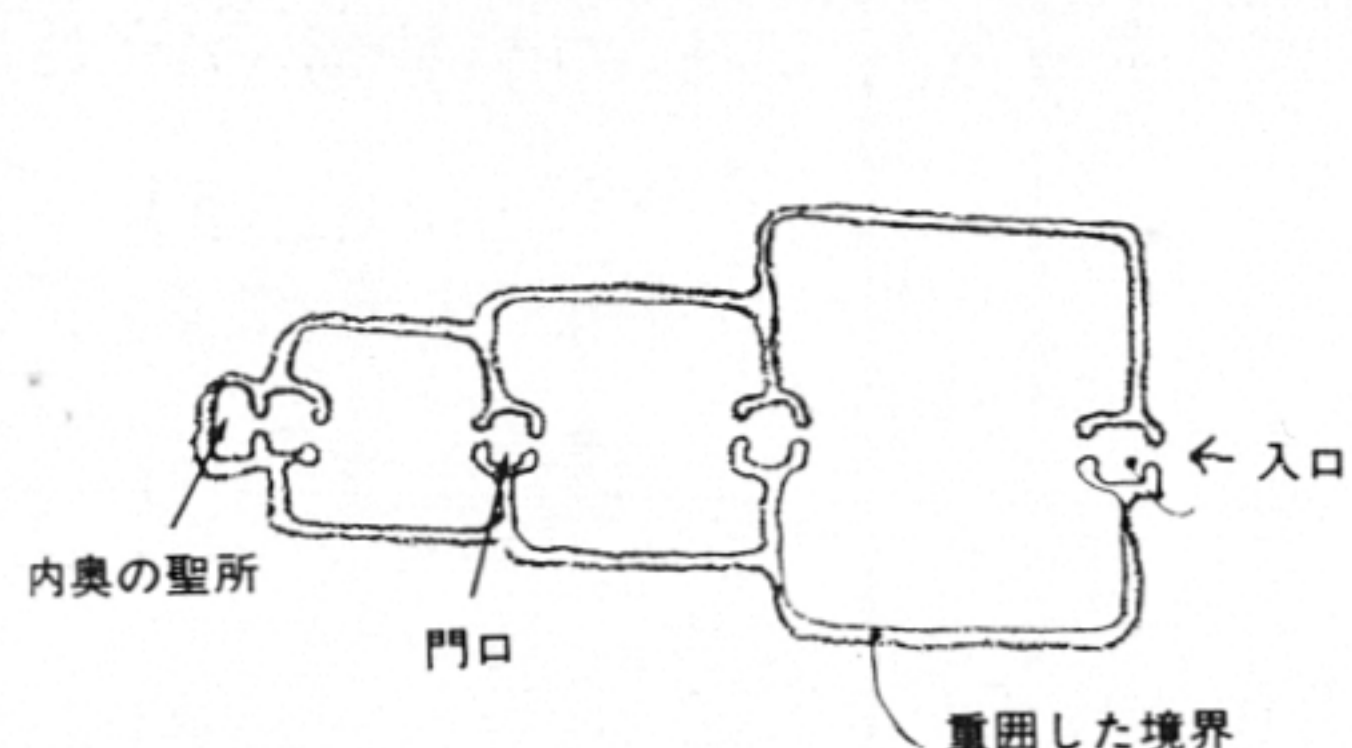


図3

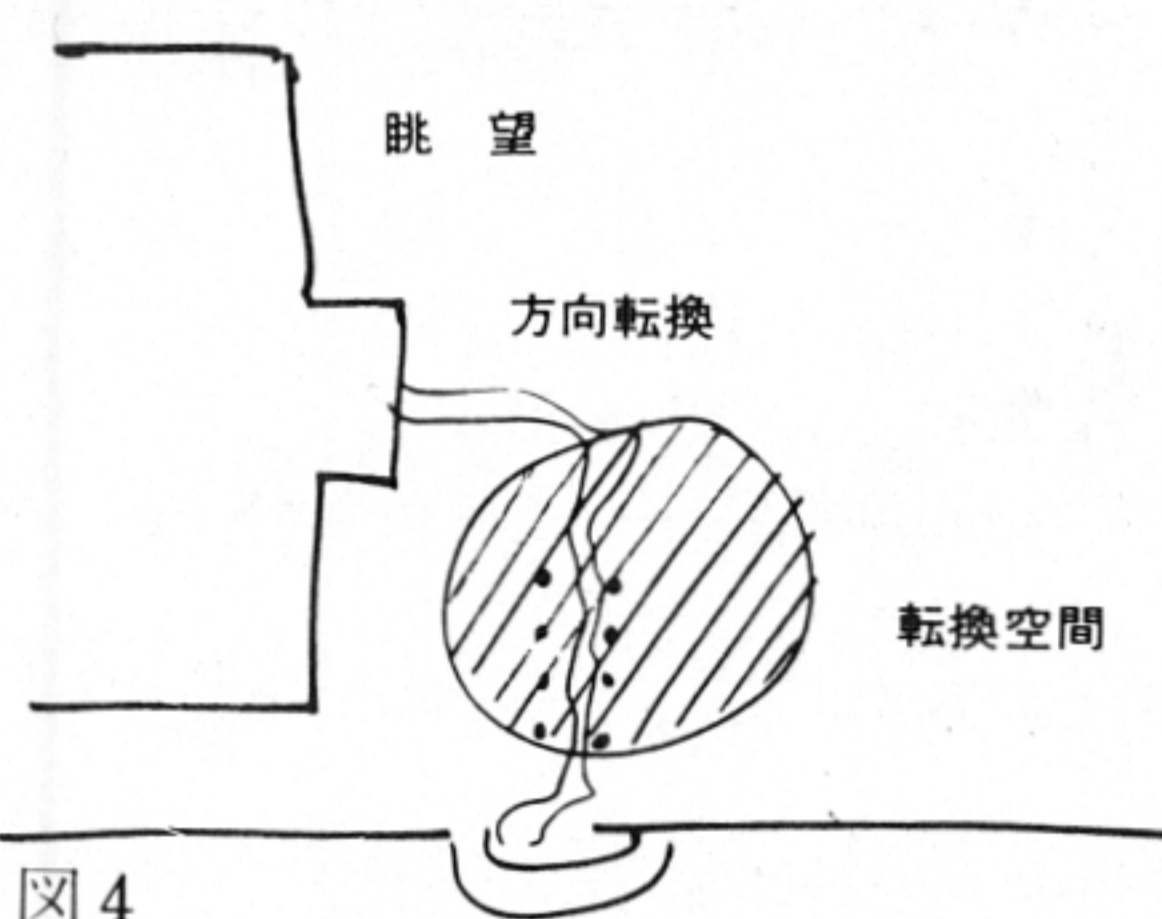


図4

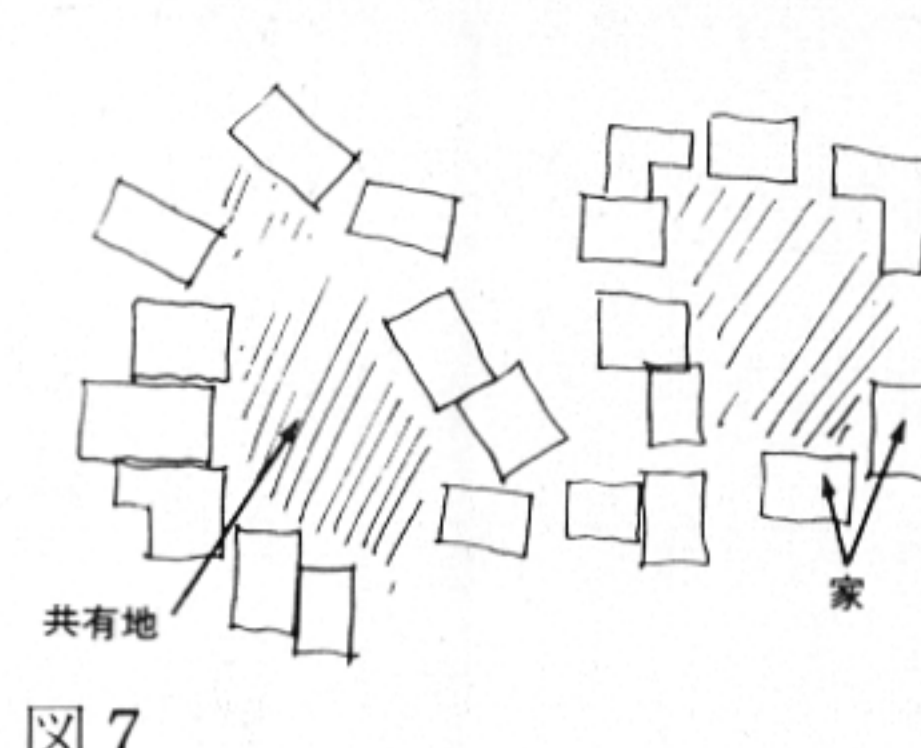


図7

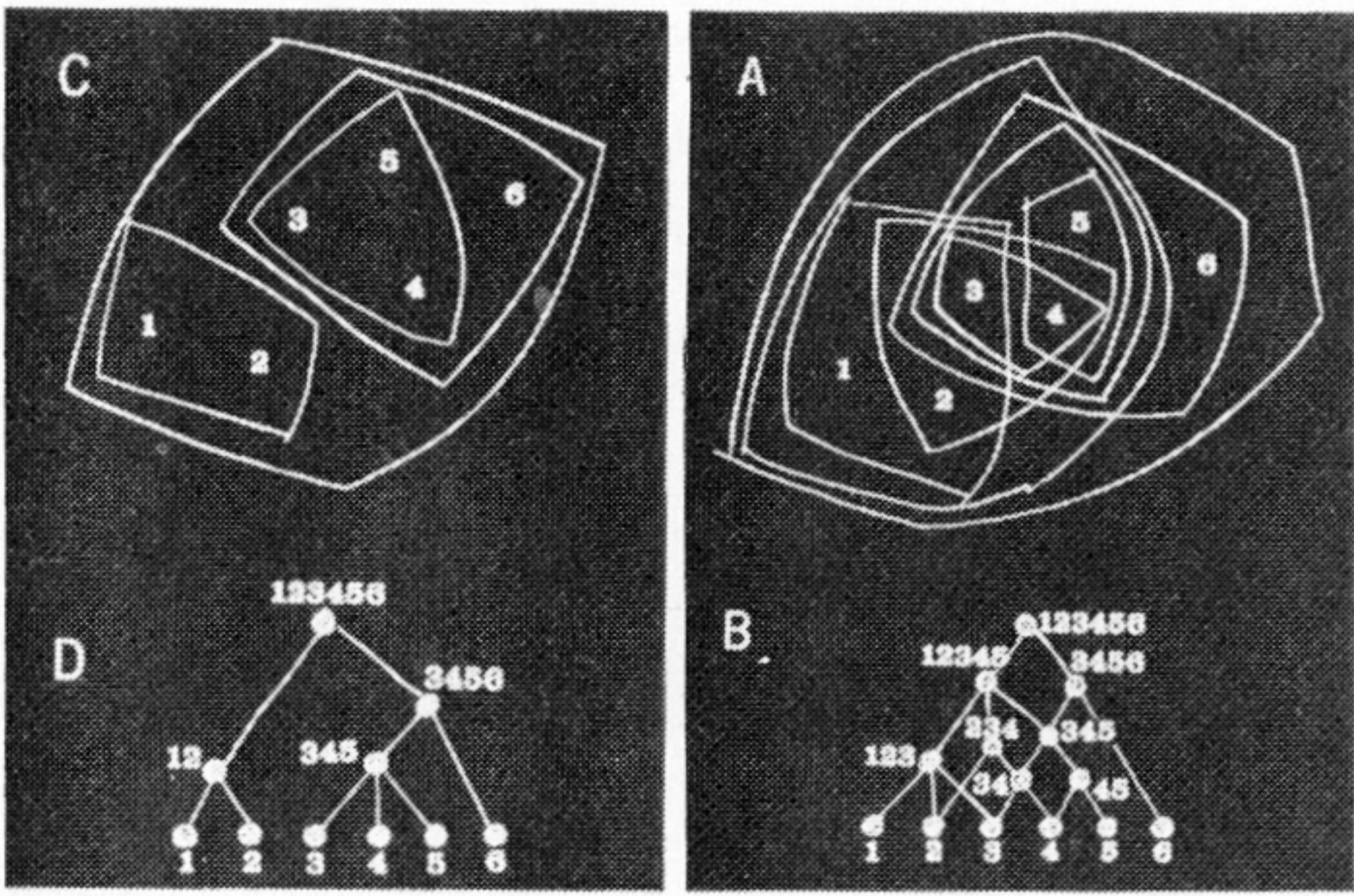


図2

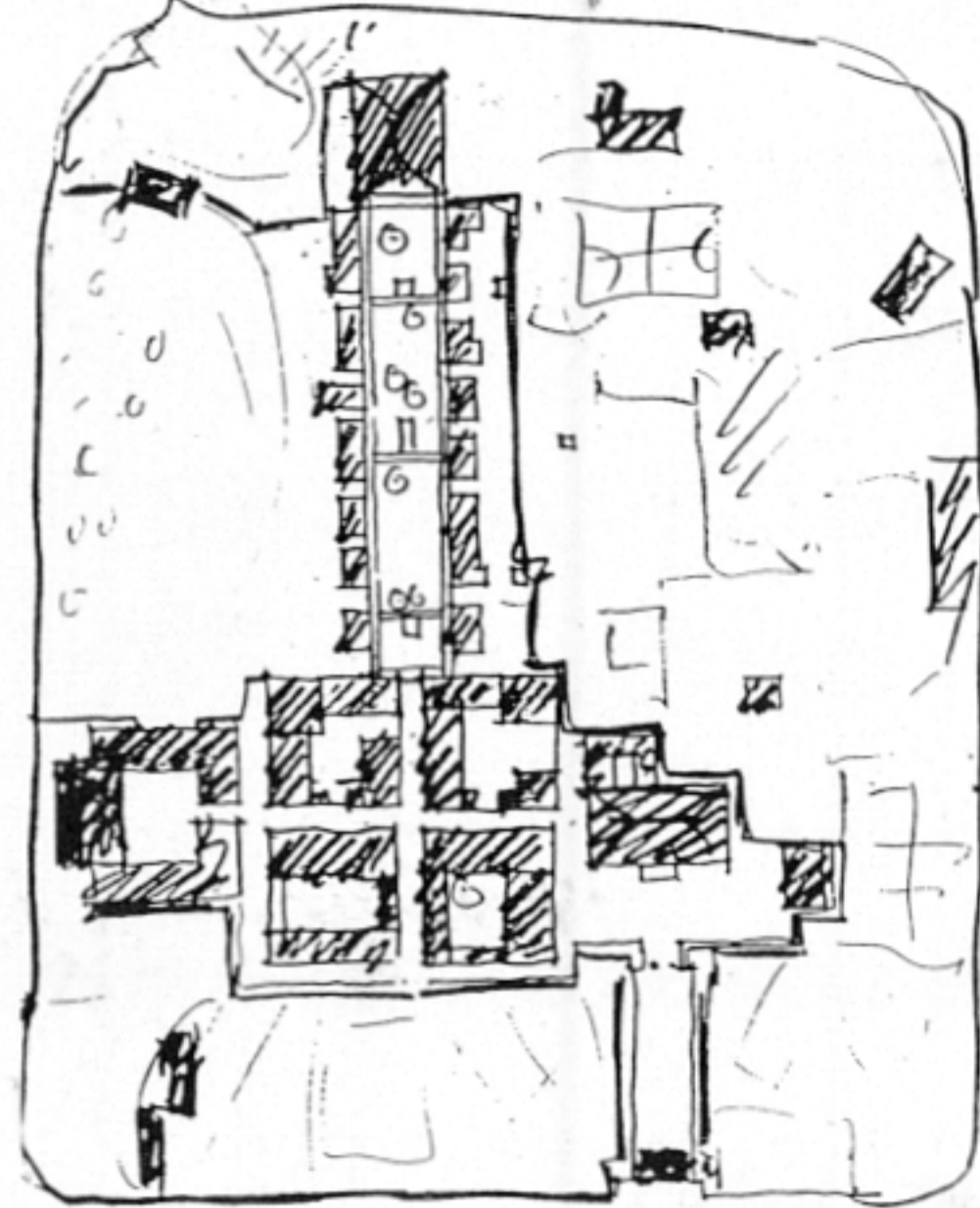


図5

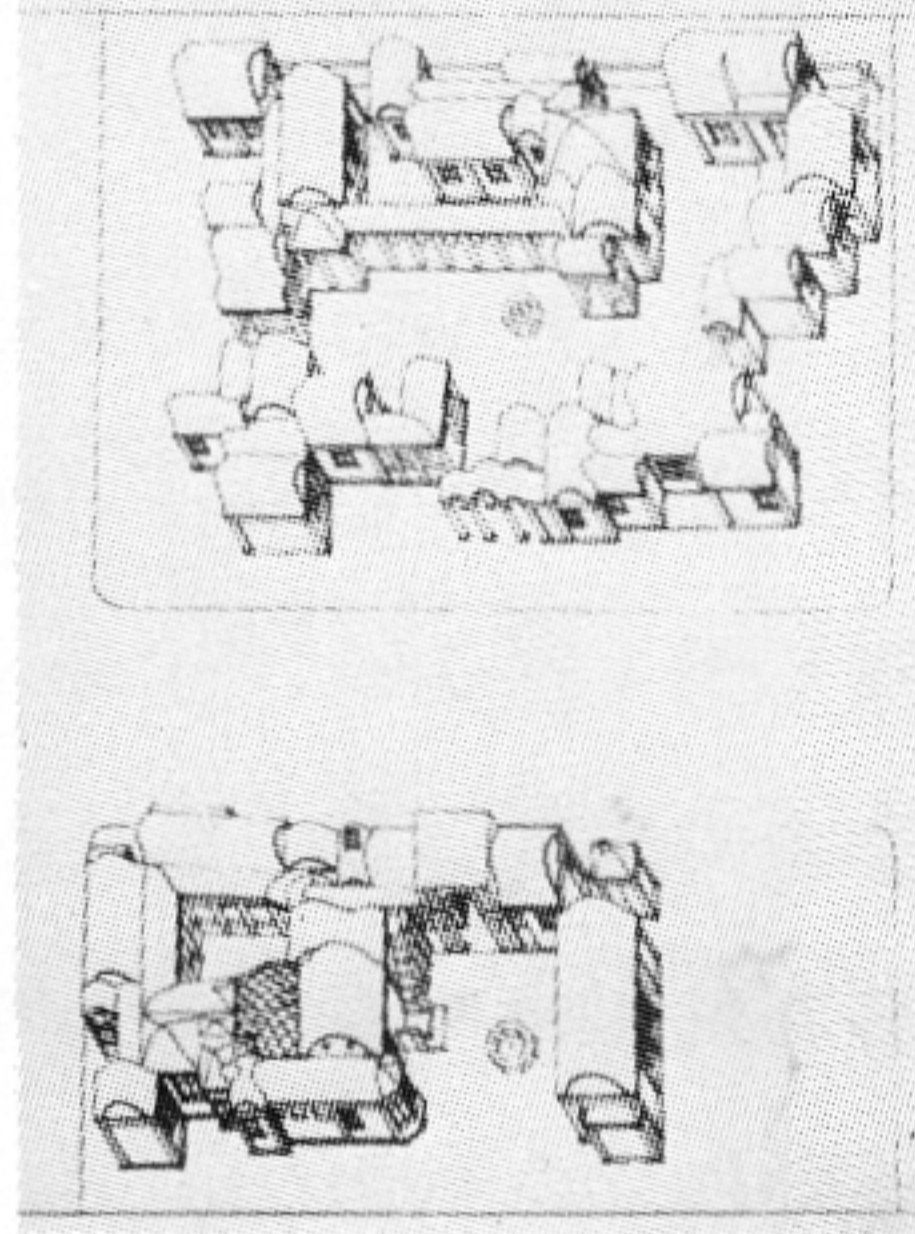


図6

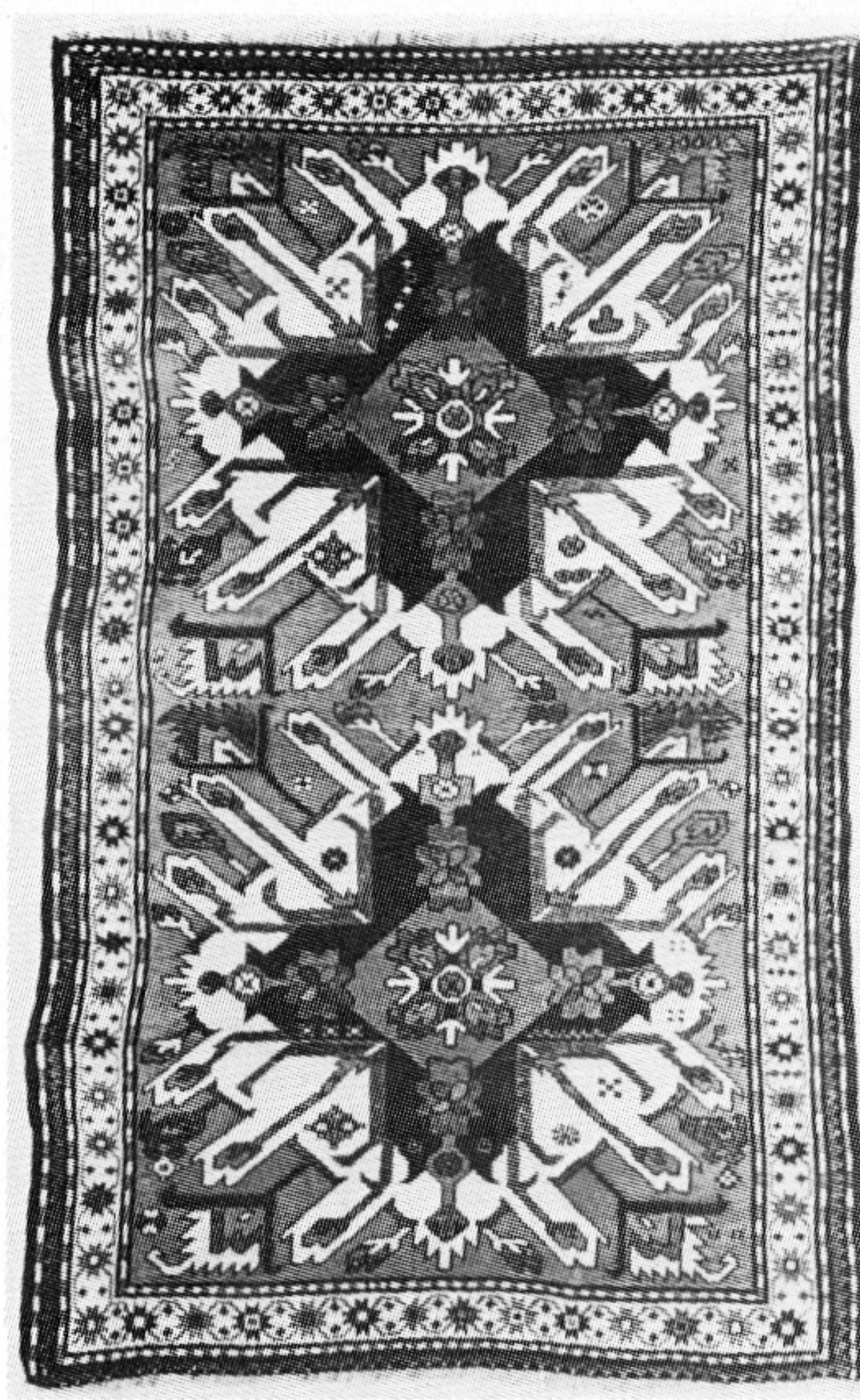


図8

的秩序」と呼んでいるのである。

### 「パタン」

さて、このような「有機的秩序」のある環境とは、どんなものなのだろうか。彼はその例として、ケンブリッジ大学を挙げている。このように大きな例ばかりではなく、日本の茶室を例に取ってもよい。茶会という儀式的進行に合わせて仕組まれた露地と茶室は、この茶会で起こる「出来事」events と「空間」space の絶妙な調和对立によるものであることは言うまでもない。待合、中門、露地空間、踏み石、にじり口、床の間、炉などは、すべての存在理由を、そのものが必要とされるコンテキストの内部の力の対決の解消として把握することもできる。

このようなコンテキストの力と、その解決の1セットを一つの「パタン」として把握することができるだろう。「有機的秩序」をもつ環境では、複数の「パタン」が相補して安定しているという構造をもっている。さらに、もっと大きな環境、村や町や都市についても、このような現象を見ることができる。つまり、「パタン」とは「出来事」と「空間」の結びついたセットを言うのである。

### 『形の合成に関するノート』から『タイムレス』へ

『ノート』（『形の合成に関するノート』）の中心課題は、「デザインのための洞察を深めてくれるような現実のリアルな写像」を求めることであつたと考えられる。その解答として彼は、「1. 形とコンテキストとそれらの調和関係であるアンサンブルをダイアグラムと名づける。2. このダイアグラム図1をコンピューターによって分析された構造に対応させ、再びコンピューターを用いて構造化してゆく。3. このプロセスは適合をつくるプロセスではなく、不適合をなくしてゆくプロセスである。」と唱えている。

まさに、このダイアグラムこそが「パタン」にほかならない。その意味で『ノート』と『タイムレス』（“The Timeless Way of Building”）は手段こそ違

え、ある一つのことを除いては精神は変わっていない。また『ノート』で他に注目すべき考え方があったら、それは「無自覚なプロセス」だと思われる。要約すれば「伝統的社会に一般的な「無自覚なプロセス」は動的平衡をもつ形を生み出すが、現代の「自覚されたプロセス」はこの動的平衡をつくり出すためのプロセスが何らかの形で破綻している。」というものであつた。

しかしながら『ノート』で彼が用いた方法では、このような「動的平衡」をもつものを創造することができなかった。したがって、理論の見直しが必要となつた。

その辺りの事情をよく示すのが、『都市はツリーではない』（1965）である。彼はここで、問題の要素が織りなす構造が、ツリー的なものではなくセミラティスと呼ばれるものであつて図2、この差が失敗の本質であつたと考えたようである。けれども、セミラティスと言えども「動的平衡」の写真のようなものであつて、ほんの一瞬しか捉えられないことには変わりない。つまり、部分品の組み上げという面では本質的には変わっていない。むしろ、このような「動的平衡」を生み出す「プロセス」から眺めたほうが、はるかに捉えやすい。複雑な編み物の構造も、限られた編むという「プロセス」から出来上がるという事実を考えれば、自明なことである。

『ノート』から『タイムレス』までには、このような挫折と発想の転換があつたが、さらに重要な転換があつた。それは「価値」value の問題である。

### 「価値」\*2

『ノート』では、人間の勘のような要素や知的ルーティンワークに対して不信感をあらわにしている彼が、『タイムレス』で、その不安定なはずの人間の心や精神について言及することをほばからないという違いがある。この違いは、日本でアレギザンダーに興味をもつ人びとの『ノート』派と『タイムレス』派の人びとにも、深い断絶を与えている。

彼がなぜ、このような変化を遂げたのかは、「適

合」「良さ」「美しさ」について考えれば、理解の一助となるだろう。一体、誰が「適合」「良さ」「美しさ」を判断するかというと、最終的には人間であるから人間の心が問題となるのは当然である。数学の問題では、論理性のみが重要であると言う人もいるが、そのような人も数学的直感にお世話になっているはずである。そのような直感の源泉が何であるかについて、深く考えるべきである。

このような直感的能力が、アレギザンダーの言う「価値」value とつながりをもっているし、「名づけえぬ質」の一つの側面なのである。つまり、人間があることさらに共鳴して清浄感と充実感をもつということである。この発見こそが、二つの時期を分けているのだ。

### 「生成力」

良い「パタン」ほどよく繰り返される傾向がある。例えば、良い建築、特に宗教建築では幾重にも重なった境界を通過することで、祭壇へ到達するというような性質がある。また、入口での場面転換も効果的に行なわれている。これらは、それぞれ『パタン・ランゲージ』\*3に収録されている「聖域」図3と「入口での転換」図4に対応している。これらは、このような建築で起こる出来事によく適合しているために、地域・時代を超えて繰り返されるのであろう。したがって、良いパタンは繰り返し使用され、変化し、多様な空間を生み出す「生成力」を備えている。ではなぜ「パタン」が、このような多様性をもつ「生成力」をもつのであろうか。

言語の「生成力」について考えると、話し言葉の豊かさや多様性は「言いたいこと」とその場の状況に合わせた「発話」をつなげる一つの「規則」によるものだが、ここで現われる「規則」とは強制するものではなく、その場の状況に合わせて流動的な選択を可能にするものである。つまり「発話」の多様性は、「話し手」と「その場の状況」によってもたらされるものだと考えることができる。

これと同様なことが、「パタン」とそれを構造化

した「ランゲージ」にも起こりうる。そのためには「話す人」ユーザー+建築家の意思の疎通、「その場の状況」「敷地の力」などが必要になってくるわけである。このような発想から「ユーザー参加」「敷地での設計」という考えが出てくる。

## 「プロセス」

それでは「パタン」が一つの形となって「価値」をもつものになるためには、どんな「プロセス」が必要なのであろうか。

それは、『オレゴン大学の実験』の中では「漸進的成長」と呼ばれ、『タイムレス』の中では「分化」differentiation と呼ばれているプロセスによるものである。そのようなプロセスの例として、胚の発生プロセスが挙げられる。つまり胚が胎児に成長するプロセスは、部分がとりついて組み立てられるのではなく、すでに部分となるものが胚の中に存在し、成長のプロセスにおいて分化するプロセスだと言える。

それでは、このような「分化」のプロセスをどのような手順で、「パタン」を使って建築なり近隣の形に発展させてゆくのだろうか。

まず第1に、プロジェクトに必要と思われる「パタン」を抽出し、これにプロジェクトに特有な「パタン」を付け加えてリストにする。これらのある順序に従って一つずつ頭の中に思い浮かべ、心の中の絵としてはっきり認識できるようにする。その際、簡単なスケッチを繰り返すことが有効なようである。こうして出来上がった「ランゲージ」の心の中の絵が、胚<sup>4</sup>に相当するものである<sup>5</sup>。

次に、この「ランゲージ」をもって敷地において設計することになる。「ランゲージ」は敷地の条件と対話を繰り返すことによって、徐々にその姿を現わしてくるわけである。このような「生成プロセス」が到達点として見え始めた時に、新たに大きな二つの問題に直面することになった。この二つの問題とは、「パタン・ランゲージ」を用いたプロジェクトによって問題提起されたものである。その一つは、単に設計のプロセスを改善するだけで「有機的秩序」が得られるわけではなく、施工のプロセスも改善されなければならないということである。さらに、設計施工という明確な分離は不適當であり、これらのプロセスを一つの「生成プロセス」としてプロジェクトの胚が分化してゆくような「プロセス」を獲得することが、必要となった。そして他の一つとは、「パタン・ランゲージ」が形としてさらにまとまった「有機的秩序」を得るためには、形態に関する明確な「規則」が必要だということであった。ここで言う「規則」も先に述べたと同様に、柔軟度のあるものであることは言うまでもない。そして、この二つの問題点こそが、三部作『タイムレス』『パタン・ランゲージ』『オレゴン大学の実験』を、五部作として新たに二つ“Production of House”

(以下『住宅の生産』<sup>6</sup>)“Linz Cafe”(以下『リンツカフェ』)と続いてゆく理由なのである。

## 「プロセス」を疎外する構造

『住宅の生産』<sup>5</sup>(未刊) 図6は、設計から施工までを一貫した「生成プロセス」によって行なったドキュメントであるが、これは、彼が長年にわたって試行錯誤してきた「プロセス」実現のための努力の一つの成果として見るべきだと思われる。『ノート』の「無自覚なプロセス」で指摘されたように、動的平衡を得るための「プロセス」は現代では、さまざまな点で疎外されているという発見があった。

これらの発見は、あまり知られていない彼の実践活動によるものである。それらの中には近隣を「パタン・ランゲージ」による「生成プロセス」によって行なうために、都市行政の組織や住民の組織の改編、財政の徹底的な改造にまで及ぶレポートである“Rebirth of Inner City”や“People Rebuilding Berkley”などが含まれている。このレポートの要点は、すでに『オレゴン大学の実験』に見られるようなマスタープランに対する的確な観察にも通ずるものがある。つまりマスタープランが成立する要因は、中央集権的な所有権と財政決定の権利を有する集団や集中投資といったものを前提あるいは結果として内包しているわけで、これが建物とユーザーの直接性を妨げているのである。『オレゴン大学の実験』の最も注目すべきことの一つは、有機的秩序をもつ環境には、有機的秩序をもった人間組織が必要なのだということの確認であった。

同様なことが、ハウジングについても言える。つまり、住宅の買い手が支払う金銭のうち約1/3が住宅そのものに使われるのであって、2/3が金利になっている事実(アレギザンダーがアメリカの場合について計算した数字)から抜け出すこと、「住宅・クラスター」<sup>7</sup>というパタンが生じるためには、所有権に関する問題として共有地の共同所有権というものを何らかの形で実現しなければならないという法的な問題が存在するわけである。これを見落としては、現在の解決は根なし草になってしまう。逆に言えば、私たちはそれを見落としてしまうほど形にのみ目が行ってしまっていると、反省すべきなのかもしれない。

『住宅の生産』では、その解決として、「生成プロセス」に一貫して責任をもつ「アーキテクトビルダー」、土地を共同所有する「クラスター」という法的集団、そして両者の接点として、現場において形成される物理的焦点としての「ビルダーズヤード」(後にコミュニティの中心として、また補修のプロセスの拠点として残る)が提案されている。そこでは、「ユーザー参加」がどの時点でどこまでの領域まで許されるのか、あるいは図面のない時点で財政を得て実現するための「コスト・コントロール」はどうするのか、といったような実務的な面もカバーして

いるのが特筆すべき点であろう。

## 「中心性希求のプロセス」「人間幾何学」そして「盈進プロジェクト」へ

一方もう一つの問題についての解答は、『リンツカフェ』(1981)<sup>8</sup>から現在草稿段階の“Nature of Order”や“The One”で展開される「中心性希求プロセス」Centering Process や「人間幾何学」に見ることができであろう。やはりこの原点も、「Subsymmetry」(1968) 辺りまで遡ることができる。つまり、この時期に彼が認知の構造についての研究で得た結果は、「人間の認知作用には、連続的にものを捉える作用と象徴化する作用とがあり、これらがほぼ同時に作用している。」というものであった。これらは、「全体を捉えるゲシュタルト的なものと部分を捉えようとする目」として理解されればよいと思われる。彼は最近、これらの作用によって捉えられる対象を、おのおの「全体」whole と「中心」center という語を付けて呼んでいるようである。しかし、ここで注意しておかねばならないのは、一つのものが見るスケールによって「全体」にも「中心」にもなりうるということなのである。

このような研究の成果として、「名づけえぬ質」や「深い情感」deep feeling を与える形や色について、それぞれ1ダースほどの性質が見い出された。

### 幾何学的性質<sup>8</sup>

1. 大きさの段階 Many Level of Scale
2. 良い形態 Good Shape
3. しっかりした境界 Solid Boundary
4. 曖昧さ Ambiguity
5. 反復 Repetition
6. 交互反復 Alternative Repetition
7. 陰陽 Positive-Negative
8. 相互結合 Interlock
9. コントラスト Contrast
10. 中心 Centers
11. 微妙な不規則性 Slight Irregularities
12. 内部の静けさ、バランス Inner Calm and Balance

色についても、同じような質が挙げられている。これらの性質=「規則」をうまく作用させるプロセスが、「中心性希求プロセス」である。『リンツ・カフェ』の「色彩の調和」color harmony の節はまだ名づけられてはいないが、色の中心希求プロセスとして大変興味深い部分と言える。

それでは、この「中心性希求プロセス」とはどんなものなのであろうか。一口で言ってしまえば、「次に何をすることが、既存の構造に対して最善でありかつ、心に深い情感を与えるかを、判断し作業するプロセス」である。

例えば、一つの建物の配置が与えられている場合、まず主となる部屋の位置を決め、次にその主たる部屋とそれを高める小さな部屋との取り合いを考

える。そして、これらを一つの「全体」として見た場合に、その間に出来上がった廊下などの空間と「全体」との間を調整してゆく。次に、こうして出来た建物の内部と外部のつながりをどういう具合にするのか考えると、注目している部分とそれ以外の部分、そしてそれらの境界を、「全体」「中心」の視点変化を反復して調整してゆくプロセスと見ることができるわけである。

この調整の際に、幾何学と色の性質を用いて作業をしてゆく。しかし、「深い情感」を与えない規則は捨てられ、与えるものは新しく取り入れられてかまわない。規則は、常に創造に際して再チェックされる。また、これらの規則を手掛かりとして、自分

なりに規則をヒダのあるものにしてゆくことも可能なのである。

この時点で、アレギザンダーの25年間の活動は完成期に達したと言ってよい。つまり設計から施工、さらにはそれを取り巻く諸問題についての方法が、一応そろったという意味において考えれば、そう言ってさしつかえないと思われる。

以上、アレギザンダーの25年間の活動を概括してきたが、「盈進（東野）プロジェクト」の位置づけはどこにあるのであろうか。プロジェクト開始当初の期待とは裏腹に、直営方式による現場運営が都合により不可能になった時点で、今までの活動の総決算にはなりえなくなってしまう。したがって「中心性

希求プロセス」を用いた大規模プロジェクトとして見るのがよいようである。アレギザンダー自身の評価は、現在執筆中の『Battle』と名づけられたドキュメントまで待たなければならない。

(ながつか まさみ 建築家)

\*1 アーサー・ケストラー「ホロン革命」、工作舎、1983、田中三彦+吉岡佳子共訳

\*2 Value については、プロツンとの論争の解答論文「On Value」が初出、『a+u』1984. 9月号。ピーター・アイゼンマンとの論争を参照のこと。

\*3 「ア・パタン・ランゲージ」、平田カナナ訳。

\*4 Timeless では、胚ではなく種子 seed と呼んでいる。

\*5 早大安東研究室卒業論文、佐久間、古橋。

## 「時を超えた建設の道」(“The Timeless Way of Building”) についてのコメント

難波和彦

“The Timeless Way of Building” (以下『タイムレス』と略称) は、アレギザンダーと彼の主宰する環境構造センターがまとめた、『パタン・ランゲージ』に関する三部作のうちの第1巻に当たる。

すでに、第2巻『パタン・ランゲージ』と第3巻『オレゴン大学の実験』は翻訳版が出ているから、眼にした方も多いと思うが、第1巻の『タイムレス』はまだ翻訳されていない。

『パタン・ランゲージ』の冒頭で、アレギザンダーは次のように述べている。

「第1巻の“The Timeless Way of Building”と第2巻の『パタン・ランゲージ』は、一つの成果を二分したものである。本書(『パタン・ランゲージ』—引用者注)では、建設や計画に用いる言語の一つを示し、前書(『タイムレス』—引用者注)には、このランゲージを用いる場合の理論と指示が示してある。本書では、町、近隣、庭、部屋などの細目にわたる原型について述べる。前書は、このパタンを正しく用いた建物や町のつくり方を教える

ものである。本書は前書の資料編であり、前書は本書の実践を解説する原典である。」

つまり、『タイムレス』は『パタン・ランゲージ』の理論編に当たり、『パタン・ランゲージ』は具体的な資料編だと言ってよい。ちなみに、第3巻『オレゴン大学の実験』は、応用編ということになる。

したがって、厳密に言えば、『パタン・ランゲージ』は『タイムレス』とセットで用いられねばならない。もちろん、『パタン・ランゲージ』には独立して使えるように、その理論面についての説明を加えてあるが、より理解を深めるためには、どうしても『タイムレス』を参照する必要がある。

ここに紹介するのは、『タイムレス』の冒頭の「目次の詳細」と題された全体の要約部分である。『タイムレス』は、アレギザンダーの言う「分化」(differentiation)のプロセスに従って書かれている。つまり、まず全体の大雑把な把握から出発し、徐々に細部へ読み進むという構成である。「目次の詳細」は、一つの文章として書かれている。この文

章を構成する一つ一つの文が各章のまとめとなり、さらにそれが詳細な文章に分化して各章の流れを形づくる。細部の論理が組み上げられて大きな文脈をつくるのではなく、ぼんやりとではあるが全体の文脈が先行し、これが細部へと分化し、具体化してゆくのである。したがって、論理的な筋道を逐一たどろうとすれば、『タイムレス』全体を読み通すしかない。「目次の詳細」を論理で追っても無駄である。むしろ、一種のメタファーとして捉え、全体の流れを掴むほうがよい。

それでも、『パタン・ランゲージ』においてはあまり述べられていない、「パタンをランゲージ化するプロセス」を理解する助けにはなるだろう。

いずれにしても『パタン・ランゲージ』だけでは、単なる資料集成として受けとめられる危険性が高い。それを思想として理解し、実行するには、是非とも『タイムレス』とのつながりに注目する必要がある。(なんば かずひこ)

## 「時を超えた建設の道」(“The Timeless Way of Building”) (目次の詳細抄訳)

訳：難波和彦

### 〈時を超えた道〉

「建物や町が生き生きとしている時、それは深いところで、時を超えた道が全体を支配しているからである。」

### 1. 時を超えた道：

時を超えた道とは、ほかならぬ私たち自身の内部から秩序が生み出されるプロセスである。それは努力によって獲得されるものではなく、あるがままに任せれば、おのずから湧き出てくるものだ。

### 〈質〉

「時を超えた道を明らかにするためには、まず名づけえぬ質を知らねばならない。」

### 2. 名づけえぬ質：

人間、町、建物あるいは自然の中には、生命と魂を生み出す根源的規準となる、ある中心的な質が存在する。この質は実在する確かなものであるが、名づけることはできない。

### 3. 生き生きとした状態：

私たち一人一人の生命の中にある、このような質を探り出すことこそ、すべての人にとって中心的な課題であり、人生の最終目標である。そして、それは自分が最も生き生きとできる時間と状況を捜し出すことにほかならない。

### 4. 出来事のパタン：

建物や町の中に潜むこのような質を明らかにするに

は、まずあらゆる場所が、そこで絶えず生起している出来事のある一定のパタンによって性格づけられる、ということを理解しなければならない。

### 5. 空間のパタン：

こうした出来事のパタンは、必ずその空間の幾何学的なパタンと結びついている。これから見ていくように、個々の建物や町は、究極的にはこのような空間のパタンから、しかもそれだけによって作り上げられているのである。つまり空間のパタンとは、建物や町をつくり上げる原子であり分子なのだ。

### 6. 生きているパタン：

建物や町をつくり上げているパタンには、生きているものも死んだものもある。パタンが生きたもので

あればあるだけ、私たちの内部の力は解放され、自由にはばたくことができる。しかし、死んだパタンのうちでは、内部の力の対立にがんじがらめにされてしまう。

#### 7. 沢山の生きたパタン：

部屋であれ、建物であれ、町であれ、一つの場所に生きたパタンが沢山あればあるほど、そこは一つの全体として生気にあふれ、力強く成長し、いつまでも生命力を保ちつづけるだろう。この生命力こそ、名づけえぬ質である。

#### 8. 質そのもの：

一つの建物がこのような生命力をもつ時、それは自然の一部となる。そして、海の波や草の葉のように、建物の部分部分はいつかは消え去る運命にありながらも、絶え間ない繰り返しと多様化の戯れに身を委ねるのだ。これこそが、質である。

#### 〈門〉

「名づけえぬ質に到達するためには、そこへ通ずる一つの門として生きたパタン・ランゲージをうち立てねばならない。」

#### 9. 花と種子：

建物や町に内在するこのような質は、人工的につくられるのではなく、沢山の人たちのありふれた行為によって間接的に生み出されるものなのだ。それは、人工的に花をつくることは不可能であり、花の種子から生み出すしかないのと同じことである。

#### 10. 私たちのパタン・ランゲージ：

人びとは自らの手で建物を形づくることができるし、事実、何世紀もの間、パタン・ランゲージと私が呼んでいることばを使って建物を形づくってきた。パタン・ランゲージは無限の多様性をもち、新しくユニークな建物をつくり出す力を与えてくれる。それはちょうど、ありふれたことばが、無限に多様な文章を生み出す力を与えてくれるのに似ている。

#### 11. 私たちのパタン・ランゲージ (つづき)：

このようなパタン・ランゲージは、村落や農耕社会だけで使われていたのではない。建物をつくる行為すべては、何らかのパタン・ランゲージに支配され、ひとつの世界のパタンは、常にその中に存在している。なぜなら、その世界は、そこに住む人びとの使うパタン・ランゲージによってつくり出されたものにほかならないからだ。

#### 12. ランゲージの創造力：

それどころか、パタン・ランゲージからは建物や町の形だけではなく、その質も生み出されるのだ。壮大な宗教建築に潜む、私たちに畏怖の念を引き起こすような生命力や美しさでさえ、それを建てる人たちが用いたランゲージによって生み出されたものである。

#### 13. ランゲージの解体：

しかし現代では、そのようなランゲージは解体して

しまった。もはや共有されたランゲージはなく、そのためにランゲージの深さを保つプロセスも消滅した。だから、現代では生きた建物をつくり出すことは、実質的に不可能なのだ。

#### 14. 共有できるパタン：

再び生きたランゲージの共有へと歩みを進めるためには、私たちはまず生命力を生み出す深さと力をもったパタンを、発見できるような力を学び取らねばならない。

#### 15. パタンの実在性：

次に、経験に照らし合わせてテストしながら、徐々に共有できるパタンを発展させてゆく。パタンが私たちの環境を生きたものにするかどうかは、それがどんな感じを呼び起こすかを見極めることによつて、いとも簡単に決定できるはずだ。

#### 16. ランゲージの構造：

個々の生きたパタンが発見できるようになったら、実際の建設の仕事で、自分の力でそれを一つのランゲージに組み上げてみよう。ランゲージの構造は、個々のパタンを網目状に結び合わせるることによって生み出される。そのランゲージが一つの総体として生きたものになっているかどうかは、それがひとまとまりの全体をかたちづくっているかどうかにかかっている。

#### 17. 共通ランゲージの進化：

最後に、現実の建設を通してつくられる一つ一つのランゲージから、さらに大きな構造、構造の構造、つまり、絶えず進化する町のための共通ランゲージを生み出すことができる。これが、門である。

#### 〈道〉

「門を築いたならば、それをくぐり抜け、時を超えた道の修行へと至ることができる。」

#### 18. ランゲージの生成力：

今や私たちは、豊かで複雑な町の秩序が、何千もの創造的な活動からいかにして育まれるかを、事細かに知ることになるだろう。というのも、自分たちの町に共通のパタン・ランゲージをもつことができるなら、すべての住民がごく日常的な作業を通じて、通りや建物を生き生きしたものにするからである。共有されたランゲージは、1個の種子のように何百万もの小さな行為が集まって、一つの全体を形づくる力を与えてくれる生成システムとなるのだ。

#### 19. 空間の分化：

この生成プロセスにおいては、一つ一つの建設作業が空間を分化させてゆくプロセスとなる。それは、部分を寄せ集めて全体をつくるような付加のプロセスではなく、胚の生長のように全体が部分に先行し、それが分裂することによって部分が生み出される展開のプロセスである。

#### 20. 一度に一つのパタン：

展開のプロセスは一步一步、一度に一つのパタンで進む。一つのステップで、一つのパタンだけが誕生

する。最終結果がどれだけの強さをもつかは、個々のステップの強さに掛かっている。

#### 21. 建物に形を与える：

個々のパタンを一つにつなげてゆけば、文章を思い浮かべる時のように、スラスラと自然の性質をもった建物の全体像が形をもって浮かび上がってくる。

#### 22. 建物の集合に形を与える：

同じような方法によって、グループで大きな公共建築を考えることもできる。全員で敷地に立ち、共通のパタン・ランゲージを使いながら、ほとんど一心同体のように作業を進めることができるのである。

23. 施工のプロセス：このようにして建物を心の中に描いておけば、敷地に印した標識の上に、直接建設することができる。ここでも再び共通のランゲージを用いれば、図面は全く不要である。

#### 24. 修復のプロセス：

さらに幾つかの建設作業が、これに続く。これはそれまでの結果を修復したり補強したりするもので、これによって一つ一つの作業では決して生み出すことのできない、大きなしかも複雑な全体が、ゆっくりと生み出されるのである。

#### 25. ゆるやかな町の出現：

最後に、無数の建設作業が共通のランゲージの枠組みの下に集合することによって、全体性を備え予測を超えた生きた町が、何のコントロールもなく生み出されることだろう。これが、あたかも無から生み出されるような、名づけえぬ質のゆるやかな出現である。

#### 26. 朽ちることのない質：

こうして全体が出現するにつれ、私たちはそれが時を超えた道と名づけた、あの朽ちることのない質を帯びていることに気付くだろう。それは特異な形態学的性質であり、建物や町を生きたものにするには欠かすことのできない、はっきりとした確かな性質である。これが、建物における名づけえぬ質の具体的な形象化にほかならない。

#### 〈道の真髄〉

「しかし、ここに至っても、時を超えた道は完成の域に達せず、名づけえぬ質を完璧に生み出すことはできない。その門を背後に立ち去るまでは。」

#### 27. 道の真髄：

実のところ、この朽ちることのない質は、最終的にはランゲージとは何の関係もないのだ。というのも、ランゲージとそこから生じるさまざまなプロセスは、私たちに生まれつき備わっている根源的な秩序を解放してくれるにすぎないからである。ランゲージは何も教えてはくれない。それは私たちがすでに知っていること、繰り返し出会う問題を思い起こさせてくれるだけだ。しかも、それは自分の考えや意見を捨て、自らの内部から湧き出すものだけに眼を向ける時に、はじめて可能となるのである。

(なんば かずひこ)